

川端裕人先生とOBとの座談会

日 時：2021年9月26日 14:00-15:30

場 所：地学オリンピック事務局ビル

出席者：

川端裕人先生 『空よりも遠く、のびやかに』の著者

O B

大野 智洋 (第12回タイ大会参加 東京大学理科一類2年)

田中 匠 (第12回タイ大会参加 東京大学理学部天文学科3年)

小山雪乃丞 (第10回日本大会参加 東京大学大学院地球惑星科学専攻修士1年)

道蔦健志朗 (第7回インド大会参加 出版社勤務)

(安河内)

中里 徳彦 (第6回アルゼンチン大会参加 監査法人勤務)

橋本 敏明 (第4回インドネシア大会本選出場 民間気象会社勤務)

司 会 久田健一郎 (地学オリンピック日本委員会 前理事長(2013-17)、現理事)

事務局 澤口 隆 (地学オリンピック日本委員会 事務局長・理事)

久田 これから川端先生との座談会を開催いたします。

本日の座談会の趣旨は地学ってなんだろうかということです。

地学は一般の人にとってはわかっているようでわかっていない学問だとも思います。今回、川端先生の本を読んで大きな衝撃を受けました。それは川端先生が地学に対して優等生的な理解をしていることです。とてもありがたいことです。本日お集まりいただいたOBの皆さんは、現在多方面で活躍されていますが、皆さんにとって地学って何なんだろうというご意見を伺いたいと思います。そして、今までの地学・これからの地学についてのヒントをこの座談会でいただきたいと思います。それがこれからの地学オリンピックのモチベーションになるかと思います。また、川端先生がなぜこの本を書かれたかも伺えればと思います。

それでは初めに皆様の自己紹介と本を読んだ感想を簡単に述べてください。

大野 来年度から東京大学理学部の地球惑星環境学科に進学する大野です。地質や岩石のほか、最近是国内油田にも興味があります。感想は私が高校でやりたくてできなかったことや2020年以降やれなかったことが詳細に書かれていて禁止カードをことごとく打ち抜いてくれました。(笑) また、ポジティブにもネガティブにも共感できる場所が多かったです。

川端 ありがとうございます。共感したことというのはどういうところでしたか。

大野 2020年以降、主人公が出来なかったことが私にとっても同じような内容だったことです。

- 田中 現在東京大学理学部天文学科の 3 年です。将来は銀河天文やそれ以上の大きなスケールの宇宙を扱いたいと思います。本を読んだ感想はこの本は青春やスポーツだけでなく地学の競技（地学オリンピック）にも触れており、また、純粋に地学を楽しんでいることも組み合わせさって面白かったです。
- 小山 現在は東京大学大学院理学系研究科地球物理専攻の修士 1 年で沈み込み帯の岩石学や構造地質学の研究をしています。主人公が地学に知識のない状態からどんどん地学に引き込まれていく様子にリアリティがあり、面白かったです。また、ボルダリングと地学を結びつけたことが地学を知らない方にもわかってもらえたのではないかと思います。また、私は微化石の研究をしているので、そちらも出して欲しかったです。
- 安河内 大学では地質を学んだあとロシア史に進学し、今は出版社で世界史の本の出版に携わっています。何かあると「これも地学だ」という主人公の言葉は就活時に私も良く使っていました。世界史も地学の一部だと言っていました。
- 川端 地質時代の最新の部分に人類史があるわけですからね。
- 安河内 本の感想としては主人公が地学部の中で他の部員たちの影響で、だんだんと地学に染まっていく様子にとってもリアリティがあり、面白かったです。
- 中里 現在は公認会計士の試験を受け、公認会計士の 1 歩手前の立場で、監査法人で働いています。本の感想は地学部の雰囲気がとても良く描写されており、理系出身者としては読んでいて少し恥ずかしくなりました。（笑）また、東京オリンピックのボルダリングともリンクして、ボルダリングの勉強にもなり、楽しめました。
- 橋本 学生の時は地球内部のマントルの動きの研究をしていましたが、今は気象分野で働いています。私は中学・高校の山岳部の顧問の先生に誘われて地学に入っていたので、主人公と似た境遇を感じながら読みました。顧問の先生の口癖が「地学は King of Science」だったところもとても本の内容と同じで、自分の過去を振り返り少し恥ずかしいと思いながら読みました。また、クライミングやジムでのトレーニングの描写にとってもリアリティがありました。この本は高校時代の山仲間から最初に紹介され、青春を取り戻した気がしました。（笑）
- 川端 読書感想サイトで「私には最初から最後まで痛い気持ちで読みました。」というのがあったんですが、そのネガティブな感想が良くわかりました。
- 久田 皆さん、ありがとうございます。それでは次に川端先生からこの本を書くきっかけについてお話していただけますか？
- 川端 それでは本に書かれていない根っこの部分についてお話します。私は兵庫県生まれですが、10 歳から大学に入るまで千葉県で暮らしていました。千葉県の公立高校の 8 割から 9 割に地学部があります。そのまま普通に地学部に入りましたが、それがレアであったことを知ったのは社会人になってからで、その経験が貴重だったと後になって実感しました。ただ、私がいたのは皆が天文に興味があり、地質

の先輩が一人もいないという地学部でした。地学準備室には地質の標本がたくさんありラベルもついていましたが、それがわかる人がいないので謎でした。大学の専攻は科学史なので、大陸移動についての科学史などは学びましたが、その時はそれくらいでした。その後、息子がクライミングにはまり保護者として引率していましたが、クライミングをしている壁が埼玉、神奈川の石灰岩でした。あちこちに化石があるのに、クライミングをしている人はスルーするんです。私は地質のことは詳しくないと言っても、化石を見たら地学部の魂が黙っていないじゃないですか。こんな面白いものがあるのに、みんななんで関心ないんだろうと思ってましたね。そして東京オリンピックの前にスポーツ小説の依頼があったときにクライミングが思い浮かび、それに地学が結びつき、結末として新型コロナの時代を描くことになりました。本来なら、本を書く前にこのような座談会で、地学オリンピック経験者の話を聞いていれば、小説がもっと「痛く」なったのかもしれませんが。(笑)

しかし、今後この延長上で主人公が「地学は理科の王」だと熱く語るような小説を書くならば、今日のことを力になります。また今日のテーマに「地学ってなんだろう」がありますが、地学はまず日常的からつながる「問い」が先立つことが多い学問だと僕は感じます。その時に手持ちの武器を総動員するのが地学の特徴だと。それは、高校の地学を見れば顕著で、物理も科学も生物も、それぞれの分野をそれぞれの方法で深めていくのに、地学だけは他の教科で出てくる様々な知識や方法を最初から総動員しますよね。「問い」を中心に束ねられているのが地学だというのが私の地学観で、本日もいろいろなジャンルの人たちが地学の旗のもとに集まっているわけですよ。

久田 地学ならではのことがあると思います。今日集まってもらったのは地学オリンピックを経験したOBたちですが、いろいろな分野にどんどん進出してもらいたいという気持ちがあります。それは地学の特色でもあると思いますが、中里くんはどう思いますか？

中里 物理ならある方程式から進む方向性がありますが、地学自体が地質・気象・海洋・天文とはっきりと分類されていることが他の分野と異なる特徴だと思います。そのためいろいろなことに興味を持つ人が学ぶとても楽しめる分野だと思います。

久田 そもそも地学にはそういうところがあるね。安河内君はどうですか？先ほどの君の歴史観には共感できると思ったのですが・・・。

安河内 そうですね。地学というのは物の見方を変える・解像度をあげる学問といった感じがしています。地学をかじった人は普通に歩いている空を見れば何雲だろうと思ひ、壁を見た時も何岩だろうと考えたりします。すなわち、視界に入ったものの見え方が細かくなってくるので、見える風景もただの繰り返しではなくそこに意味を見出せるようになります。

- 久田 社会に出るといろいろなところに関心が出てくるのはとても良いことだと思います。
- 小山 地学は他の学問よりも敷居が低いと思います。ほんの少し地学を知っただけでも見える景色が変わってくるのが知的好奇心を満たしてくれて、さらに知りたいと思うようになってくることに共感できます。
- 川端 地学の面白いところは地学が標準的に設定する地球や海洋や気象などの問題は我々からみると十分マクロですが、宇宙的に見るととても小さい話です。また、微化石はとてもミクロな話です。地学はそれらをリンクしてちょうど両にらみできるくらい良い塩梅なっていると感じます。そして、その超マクロの宇宙に興味のある田中君と超ミクロの微化石に興味にある小山君が隣同士に座っていることが面白いです。
- 久田 地学の特色は空間と時間です。この本の中にもクライミングをしたら1mで何千万年という記述がありますが、自分が地質調査しているときはそんな思いは全くなかったです。
- 川端 私は息子のクライミングを見ているときは暇だったので、この辺は1cmが何年かいつも計算していましたよ。登っている人を見ながら、ここを上までいくと百万年とか考えていました。(笑)
- 久田 その感覚は私にはとても新鮮でした。
- 小山 私は空間です。石をみるとその石が出来た地下の深さを考えていました。
- 川端 すべてのスケールの現象を相手にできるところが地学の面白いところでよね。
- 田中 スケールが広いだけでなく、その広いスケールの現象がそれぞれかかわりあっているところも面白いです。銀河を考えても違ったスケールの現象が複雑に関わりあっています。
- 川端 ビッグバンでの元素合成を研究している人もいれば、分子のことを考えながら銀河系や恒星系の生成のダイナミックスを研究している人もいるわけですからね。宇宙生物学を研究している人も宇宙のケミカルなことにとっても関心を持っていますよね。
- 久田 橋本君は宇宙と地質の間の気象を行っていますが、その分野での地学の特色として感じることはありますか。
- 橋本 宇宙や地質を行っている人は地学の他の分野の話も良くしますが、気象の人は割と気象分野に特化している人が多いように感じています。火山が噴火するとPM2.5が観測される量が増加するなど、気象にも影響がありますが、火山は地面由来の現象であることが理由なのか、気象界限はあまり盛り上がりません。(笑) 気象分野は予報に特化している人が多いように感じます。また、気象の中でも細分化しており、例えば積乱雲のことだけや、気候のような大規模・広範囲な気象現象

を扱うなどスケールが幅広いです。そのためにあまり他の分野に出ていかないのではないかと思います。

川端 気象はそれだけで生態系が作れるだけの巨大な産業だと思います。

橋本 それがちょっと残念に思い、他の地学分野も広めたいと考えています。

久田 橋本君は気象以外のことをよく知っているのです、そのように思えるのではないのでしょうか。それはおもしろいですね。

川端 本には詳しく書かなかったのですが、小説の中の地学部の顧問の先生は海洋シミュレーションが専門なので、地質を指導できなかったという設定です。多分皆様には納得していただけるのではないかと思います。

久田 ここで少し話を変えたいと思います。川端先生にとっての地学のいろいろな知識は地学部に入っていた高校時代に獲得したのでしょうか？

川端 私はいろいろな方面に関心があったので、地学に引かれました。しかし、地理学と地学の境界のような雑誌、ナショナル・ジオグラフィックの日本語版のWEBサイトに長い間連載を持たせていただいている「研究室に行ってみた。」で人気があった回の内容をもとに本が1冊まとまります。たとえば『宇宙の始まり、そして終わり』は今ドイツのマックスプランク宇宙物理研究所にいらっしゃる CMB (Cosmic Microwave Background) の研究者の小松英一郎さんをインタビューしたらとても面白くて小松さんと一緒に作った本です。このような仕事をしているので、高校生の時あった関心がさらに広がります。1つの分野の内容にとらわれず、その時その時に多くの人の話題になったことをピックアップし、そこに自分の関心を重ねていける場所を与えられていることが大きいです。高校時代のことはそれらを養う根っこになっています。

久田 先生の高校時代のことをもう少し聞かせてください。

川端 地学部では残念なことに地質の先輩がいませんでした。そのため、空ばかりみていましたが、お金がなかったので、赤道儀を自分たちで作ることから始めました。それを使い観察を始めましたが、研究よりは仲間と共有した時間の方が思い出深く、地学部が居場所みたいな空間でした。

久田 OBの皆さんも地学部でしたか？ 天文部を含めて良いです。

OB全員 地学部または天文部でした。

久田 ああ、そうなんですか。皆さんもその時の部活の経験は地学オリンピック出場に際して大きかったですか？

小山 大きいと思います。

久田 今からその時を振り返ってみて、川端先生と同じようにその時のことが今に広がってきていると思いますか？ 地学オリンピックの成功の1つがその時の体験だと思いますが如何でしょうか。

- 中里 私は気象に興味があったのですが、高校には気象部はありませんでした。しかし、大きな望遠鏡があったので、それを使ってみたいと思い、天文部に入りました。しかし、天文部の顧問の先生が地質専門で、結果としては地質天文部でした。(笑)そして、顧問の先生の誘いで地学オリンピックに参加しました。その結果天文だけでなく地質を含めすべての内容を勉強することになったのは地学オリンピックのおかげだと思います。
- 久田 中里君は地質専門だと思っていました。
- 中里 いや、違います。(笑)
- 久田 他の方の地学部の体験も教えてください。
- 小山 私は地質しか興味がなかったのですが、地学オリンピックや学校内での研究発表会を通して、地学全般に視野が広がりました。
- 大野 中学に入ったとき地学系の部は天文部しかなかったのですが、地学オリンピックを通じて、小学校の時に興味があった気象・化石・岩石がすべて地学分野であったことに気づかされました。その後なんとなく地学系に進む形になっていました。顧問が日本史の先生だったので、部活動としてはそれほど充実していませんでした。
- 久田 地学の部活動の思い出はいくつか出てきましたが、川端先生はどう思いましたか。
- 川端 地学部の顧問の先生は少し変わった人が多いですね。(笑)今思い出しましたが、私の地学部の顧問の先生は3年後に教員を退職する予定でお坊さんの修行をしている人でした。そのためお経の話をしてくれました。それも地学の一部だったのかもしれません。
- 澤口 地学オリンピックの予選では毎年興味のある地学分野のアンケートをとりますが、ほとんどの人は天文です。小・中・高で地質に興味を持つ人は変わった子です。しかし、国際地学オリンピックでは地質重視でそこにねじれがあります。そのため、研修で地質を洗脳して国際大会に連れていきます。(笑)
- 川端 これから宇宙生物学系の話も生徒の関心を引くのではないですか。
- 久田 我々はどこから来たのかを考えると宇宙生物学がキーになってくるでしょうね。
- 川端 今日是非OBの皆様にも聞いたかったことがあります。国際大会を通じて世界や日本の仲間との交流があるわけですが、今から思い返して自分のなかでどんな経験が思い出されるのか、それがどんな風に自分の中で位置付けられているのか教えてください。
- 大野 国際大会に参加しての一番の収穫は隣に座っている田中君と知り合いになったことです。天文で田中君と戦うのは到底無理で、国際大会後もSNSでの交流を通じて今まであまりなかった天文への興味をもたらせてくれました。

- 田中 大野君との交流で得られたことも多いのですが、地学オリンピックに挑戦をすることで、もともと興味があった天文だけでなく地質なども勉強することで地学すべてが面白いと思えるようになりました。本選や国際大会の海外参加者にはマニアックな地質の知識を持っている人がいて、いろいろと教えてもらいました。
- 小山 私は岩石や鉱物に興味がありますが、今までは関東周辺の石だけだったのが、本選や海外の参加者をとおして日本や世界に広がり私の視野も広がりました。国際大会のときに知り合った台湾の友達がきっかけとなり、大学院の時に台湾を一周したのですが、自分のなかで空間的視野が広がり、今の行動力につながったと思います。
- 川端 小山さんは国際日本大会の選手でしたが、その時ホスト・カントリーとして海外の選手に頼られませんでしたか？
- 小山 そうですね。日本の自然環境などについて聞かれましたが、英語が苦手な私にとっては相手から話しかけてもらい会話が始まったので、お互いに助け合えました。
- 川端 よその国で行うよりは目新しいものは少なかったでしょうが、それが逆に貴重な経験になったのではないのでしょうか。
- 小山 日本大会ならでの良い経験をしたと思います。
- 安河内 私はインド大会に参加しましたが、強烈な異文化体験をしたと思います。
- 久田 それは食べ物とか文化とかすべてですか。
- 安河内 そうです。それに街並みや人々もです。国際大会では台湾代表と仲良くなり、日本に来たときは案内しました。また、私が台湾にいったときは台湾代表の人が案内してくれました。また、本選や代表の人たちとの交流が、大学での地質部に入るきっかけになったと思います。
- 中里 地学オリンピックへの参加が自分自身を理解するきっかけになったと思います。私はプレッシャーが大きいほど力がでるタイプであることがわかりました。具体的には国際大会に行く前に顧問の先生が国際大会参加だけではなくメダルの色を求めたので、ものすごいプレッシャーとなりました。(笑) 多分、顧問の先生は私の性格を見抜いていたのではないかと思います。その結果日本で1番の私が金メダルをとらなければいけないということで、苦手な地質も一生懸命勉強して金メダルが取れました。その後も自己暗示でプレッシャーをかけるよう行動が変わりました。
- 久田 他の国の選手たちの様子はどうでしたか？
- 中里 金メダルで大学合格ができる国の選手は人生をかけていました。それを見て私も気合が入りました。しかし、私が金メダルをとったので、だれかその国の選手の一人在大学に合格できなかったことを思うと少し申し訳なく思いました。(笑)
- 橋本 私は国際大会に行けなかったのですが、代表選抜時の英語面接で面接官の言葉が私の人生を変えました。というのも、私を地学の道に引き込んだ高校の山岳部の先

生が「地学は楽しいけれど、それで食べていくのを目指すのは、就職先もあまりないので、やめておいたほうがいい。」と常々言っていました。当時大学付属の高校に通っていたので、大学はそのまま工学部に進みました。しかし、面接官の「大学院で他大学の地学分野に進んだら」との言葉が忘れられず、大学院から地学分野に変更しました。その結果、地学を仕事にすることができました。また、当時の地学オリンピックにはOB会もなかったので、上下のつながりはありませんでしたが、同世代での友達交流では楽しみました。

久田 本選はつくば市で2泊3日の日程で行いますが、試験の終わった2日目の晩は標本の交換会などで盛り上がるようですね。

橋本 そうです。あまりにも深夜まで盛り上がっていたせいか、代表選抜の英語面接のとき、一つ目にされた質問は「午前3時まで何をしていたの？」でした。

久田 それが醍醐味のようなですね。普段、学校では地学仲間が少ないのですが、地学好きが60名集まってほぼ徹夜で交流するのが地学オリンピックの最大の楽しみのようなのです。

川端 「徹夜の標本交換会」をメモしました。(笑)

澤口 新型コロナ禍のため2020年の本選は中止で、今年は全国の会場での開催でつくばに集まれませんでした。ブーイングがすごかったです。来年は是非行きたいです。

(休憩)

久田 今後の皆さんの自分なりの展望や夢を地学オリンピックの経験から語っていただけますか。

大野 地学オリンピックを受験するときに地元の大阪市立自然史博物館の人に大変お世話になりました。従って、博物館を通じて地球科学を知ってもらうことをやってみたいと漠然と考えています。将来、地球科学のことについて質問があったときに、答えたり研究者を紹介したりできる案内的な役割をしてみたいと考えています。

田中 私がやってみたいことは博物館などで講演会を行うことです。私は子供の時から平塚市博物館のサークル活動で星を見るだけでなく実際に変光星の観測も経験しました。それらのことや講演会などを聞くことなどが天文に、さらには地学にのめりこむきっかけになったと思いますし、この経験が無ければ地学オリンピックにも出場していなかったかと思います。将来は講演会にも呼んでもらって、誰かが天文や地学にのめりこむきっかけを作れるような研究者になりたいと思います。対象としてはいろいろな現象をマルチスケールに考えなければいけない銀河を研究していきたいです。

小山 まずは今研究中の沈み込み帯の研究を突き詰めることで、夢が現実になりつつあります。それが今までお世話になった博物館や地学オリンピックへの恩返しになるのではないかと思います。沈み込み帯の生成・発達・消失と地震や火山などの自

然現象を知りたいと思い、その知識の共有として学芸員の仕事に興味を持っています。

安河内 今の勤務先が歴史・地理の学習参考書を作っている会社ですが、地学の学習参考書も作ってみたいです。または地学を入れた科目横断的な参考書も作成したいです。

橋本 気象情報を見に来た人に、そこを入り口にして気象以外のこと、例えば地震・火山・星空などにも興味を持ってもらえるようにしたいです。

久田 その考えは我々と共通しているところがありますね。
それでは最後に川端先生に何か質問はあるでしょうか。

中里 先生の睡眠の本^(注1)は私の人生を変えた1冊なのです。この本のおかげで朝きちんと起きられるようコントロールできるようになりました。ノンフィクションの「問い」のテーマはどのようにして見つけているのですか？

川端 それはナショナル・ジオグラフィックの連載がうまく機能しています。取材の時のすぐれた研究者・専門家の発想がきっかけになっている部分が多くあります。その発想を多くの人に届けたら役に立ったり面白かったりするのではということを中心にみています。睡眠の本も色覚の本^(注2)もそのようなことから作りました。もし、「問い」が良いと思っていただけるのは、他のジャンルとのリンクを常に意識しているからだと思います。生物学と宇宙での全く違う話でもつながっている箇所を意識しています。一見ばらばらのものが実は、固体地球と海洋みたいに隣り合わせでつながっている地学の発想から来ているとの自覚があります。なお、研究者はナショナル・ジオグラフィックの次号・次次号を意識して、関連する内容から編集者と相談して選んでいます。

中里 初めは論文からでしょうか？

川端 そうですね。ポストドク以降の論文になっているレベルの研究から選択しています。

田中 昔と今の地学部の違いはありますか？

川端 学校の環境そのものが変わっていて、今はオーガナイズされていますね。昔は放任されていましたが、今は顧問がきちんと内容を考えてやっていますね。小説のために取材させてもらったところでは、もちろん自主性は重んじていますが、部員の間で議論をしてどのような方向性にするのか促して、きちんと顧問が指導していました。昔は放任という名のほったらかしでしたよね。それでも、やる気があるときはしっかりやるので、部活動の内容に波がありましたね。

大野 私は先生が書かれた「てのひらの中の宇宙」が大好きで半年に一回くらい読み直しています。その中で直観的にはわからない大きなスケールの話や生命のつながりの話が書かれていますが、どのような思考でそれらのテーマを落とし込んで良い文章が書けるのでしょうか？

(注1) 睡眠の本：『8時間睡眠のウソ。』

(注2) 色覚の本：『「色のふしぎ」と不思議な社会』

川端 それは私も良くわからないですね。小説を書くときはここにお話がきちんとあるという感覚で書きます。エンターテインメント的な話はすごい技術を持っている作家がたくさんいて読むたびに圧倒されます。しかし、私の場合はここに何かあると感じたらそれを掘り始め、それを自分の技術で削っていく感覚がすごくあります。だから他の作家さんはあまり題材にしないようなものが題材になって成立し、たまにそれに共感する読者が出てきます。そのような人がかろうじているのでベストセラーにはならなくても今も作家活動を続けられています。大野君の質問は自分の書き手としての珍しい部分を指摘されたような感じがしていて、私自身も謎なのでこれだという回答はできません。

橋本 小説に出てくるクライミングの岩場のモデルはあるのですか？

川端 あります。場所の設定は千葉県ですが、石灰岩の地層は埼玉の二子山をもってきました。また、チャートが転がっている河原は奥多摩の御岳溪谷です。千葉に奥多摩と二子山があるというイメージです。設定が千葉なので、チバニアンを出そうかなと思ったんですが、やりすぎかもと思ってやめました。二子山のあたりは付加体なので化石もいろいろ出てきて面白いですね。

小山 ヘリコプテオンが出てきたので足尾帯かと思いましたが違いましたね。

川端 それに関しては群馬自然史博物館の高桑先生と打ち合わせをしたので、関係あったかもしれません。千葉ではヘリコプテオンは探せませんでした。

安河内 この本はどのような人に読んで欲しかったのでしょうか？

川端 それは Very Good Question です。実はあまり考えていませんでした。(笑) 完全に空振りならば次に書くなと言われるのですが、次に書いてしまっているので、あまり考えずにきてしまいました。表紙の絵柄は中学生向けのように見えますが中学生が読むとは思えません。ただし、将来の地学オリンピック候補と思われる中学生からの感想は来ています。70代の人からも感想がきているので、薄く幅広い読者だと思います。既存のマーケティングとは別のところに投げている感じです。

久田 逆に誰にでも薦められる本ですね。

川端 似たようなものでは、同じ集英社で「銀河のワールドカップ」というマニアックなサッカー小説がありますが、それが「銀河へキックオフ」というアニメになって、ごくごく一部ですが今も熱心なファンがいます。

OB 全員 地学オリンピックではこの本を積極的に宣伝しないといけませんね。

久田 今日の皆さんの話を聞いて、地学は開き直っても良いかと思えます。地学は川端先生の本の中の「地学は理科の王である」が本質ではないでしょうか。先生のいろいろなジャンルにわたる探求心は地学に通じる場所があると思います。本日は長時間にわたりありがとうございました。

全員 ありがとうございました。

(参考)

川端裕人先生

1964年兵庫県生まれ。文筆家。東京大学教養学部卒業。ノンフィクションの著作として、科学ジャーナリスト賞、講談社科学出版賞を受賞した『我々はなぜ我々だけなのか』のほか、『動物園から未来を変える ニューヨーク・ブロンクス動物園の展示デザイン』（共著）、『宇宙の始まり、そして終わり』（共著）、『「研究室」に行ってみた。』、『8時間睡眠のウソ。』（共著）、『「色のふしぎ」と不思議な社会』などがある。小説には『夏のロケット』、『銀河のワールドカップ』、『エピデミック』、『川の名前』、『青い海の宇宙港』などがある。（『「色のふしぎ」と不思議な社会』の奥書より編集）